

宮沢賢治「風の又三郎」におけるオノマトペ：英・ 仏・ル翻訳との対照

Hamciuc, Monica
九州大学大学院比較社会文化学府：博士後期課程

松村，瑞子
九州大学大学院言語文化研究院言語科学部門・言語教育学

<https://doi.org/10.15017/6796433>

出版情報：言語科学. 39, pp.43-66, 2004-02-28. 九州大学大学院言語文化研究院言語研究会
バージョン：
権利関係：



宮沢賢治「風の又三郎」におけるオノマトペ
— 英・仏・ル翻訳との対照 —

Monica Hamciuc* 松村瑞子

1. はじめに

日本国内外の最近の言語研究では、擬態語・擬音語が頻繁に使用されることが、日本語の特徴のひとつであると指摘されている。同時に、日本語の擬態語・擬音語は、日本語学習者にとっては、非常に難しい問題であることも指摘されている。この様な状況において、擬態語・擬音語の日本語・外国語辞典の数が増え続けているにもかかわらず、擬態語・擬音語という品詞を、音声の面だけでなく、形態的・統合的・意味論的に取り上げる徹底した研究は極めて少ない。

日本語の擬態語・擬音語は、「オノマトペ」とも総称されているが、欧米言語にも存在する「オノマトペ」とは異なる文法的特徴を持っている。

擬態語・擬音語についての研究をしたと思ったのは、ラテン語系であるルーマニア語には、擬態語という品詞が存在しないからである。そのため、Hamciuc (2003)では、日本語のオノマトペを取り上げ、その定義や分類をルーマニア語のオノマトペと対照させた。次に、実例に基づき、日本語・ルーマニア語・英語・フランス語のオノマトペの対照研究を行い、日本語のオノマトペの文法的特徴をより明確にすることを試みた。最後に、日本語・ルーマニア語擬態語・擬音語の辞典を作成した。

本稿では、日本語・ルーマニア語・英語・フランス語のオノマトペの特徴について対照分析する。

2. 対照研究の方法と目的

本稿での対照研究は次のように行った：

第一段階で、宮沢賢治作の童話「風の又三郎」の日本語版を読みあげ、その中に使用される擬態語・擬音語・擬声語の用例と、それらが出現するすべての文脈を取り出した。次に、オノマトペがどのように翻訳されているかを調べるために、英語とフランス語訳版から対応する文脈をすべて取り出した。最後に、ルーマニア語訳版は存在しなかったため、翻訳を作成し、その中からも対応する文脈をすべて取り出した。

第二段階で、先行研究を踏まえて定めたそれぞれの定義に基づいて、取り出した日本語のオノマトペを擬態語・擬音語・擬声語と三分化し、英語・フランス語・ルーマニア語の用例からも、対応する言葉や語句などを品詞別に分類した。

* 九州大学大学院比較社会文化学府博士後期課程

次に、日本語のオノマトペと、その翻訳に相当する英語・フランス語・ルーマニア語のすべての言語形式を並列し、文法的・非文法的な側面から（形式の種類、数、使用頻度）対照させ、分析した。

さらに、この研究の中心となる擬態語の用例だけを、日本語とルーマニア語訳から取り出し、比較し、再分析した。日本語の擬態語を形態（動詞の種類）、助詞の付加／欠如、統合的機能の三つの側面から分析し、さらに形式別、助詞の付加／欠如別、機能別に数量的分析も行った。ルーマニア語の用例も形式別に分け、分析し、日本語と比較した。

3. 「日・英・仏・ル」オノマトペの対照研究

3. 1 日本語のオノマトペ - 用語および抽出されたオノマトペの数

作品は、宮沢賢治、「風の又三郎」、インターネットの図書館 <青空文庫 www.aozora.gr.jp>、底本：岩波文庫『童話集 風の又三郎』1951（昭和26）年4月25日 第1刷発行、1967（昭和42）年7月16日 第24刷改版発行を用いた。

全210文脈中にて抽出されたオノマトペ数は、次の通りである。

	出現回数	出現語数
擬態語（以下「態」）	186回	101語
擬音語（以下「音」）	55回	34語
擬声語（以下「声」）	9回	7語
合計	250回	142語

上の表の中には、例3、115、127のように、オノマトペから派生し、現在動詞として分類されることばは含まれていない。

例： ちょっと教室の中を見ますと、二人ともまるでびっくりして棒立ちになり、それから顔を見合わせてぶるぶるふるえましたが、ひとりはどうとう泣き出し始めてしまいました。（3）

「又三郎びっくりしたべあ。」一郎が三郎に言いました。（115）

すると一郎はびっくりして...（127）

また、例202、207のように、オノマトペから派生し、現在形容詞として分類されることばも含まれていない。

例： もう一郎は顔がほてり、息もはあはあとなって、自分までがいっしょに空を翔けて行くような気持ちになって、大急ぎでうちの中へはいると胸を一ぱいはって、息をふっと吹きました。（202）

はげしい風と雨にぐしょぬれになりながら二人はやっと学校へ来ました。

（207）

3. 2 日本のオノマトペの英仏ル訳

表 1 中の略語は以下の品詞および表現のことである。

V= 動詞、Adv= 副詞、Adj= 形容詞、N= 名詞。

Onomat= オノマトペ、Comp= 比喩表現。

*2= 繰り返し (例: Adv*2= 副詞の繰り返し)

0 = ゼロ (オノマトペの省略)

+ = 一つのオノマトペは二つか二つ以上の品詞で翻訳される

英語訳は、Kenji Miyazawa, *Matasaburo the Wind Imp*, translated by John Bester, Kodansha, Tokyo, 1992 を使用した。

例 2 0 2 の N (onomat) は、オノマトペから派生したと考えられる名詞を示す。

例: The thought made his face flush and his breath come quick. [...] and he filled his chest and blew out his breath in a great whoosh. Adj+ N (onomat)

仏語訳は、Kenji Miyazawa, *Train de nuit dans la Voie lactee*, traduit du Japonais par Helene Morita, Intertextes editeur, Paris, 1989, *Matasaburo, le vent* を使用した。

ルーマニア語訳は、Monica Hamciuc (2003) による。

英語			フランス語			ルーマニア語			日本語		
項目名	値	%	項目名	値	%	項目名	値	%	項目名	値	%
V	76	30.40	V	55	22.00	V	58	23.20	擬態語	186	74.40
Adv	33	13.20	Adj	40	16.00	Adv	37	14.80	擬音語	55	23.20
Adj	32	12.80	Adv	29	11.60	N	33	13.20	擬声語	9	2.40
0	23	9.20	Adj+N	26	10.40	Adj	32	12.80			
N	22	8.80	N	18	7.20	0	23	9.20		250	100.00
Adj+N	17	6.80	0	12	4.80	Onomat	10	4.00			
V+N	10	4.00	N+Adj	12	4.80	V+Adv	9	3.60			
V+Adv	9	3.60	V+N	11	4.40	Comp	8	3.20			
Adj+Adj	4	1.60	Adv+Adj	9	3.60	N+Adj	6	2.40			
Adv+Adj	4	1.60	Onomat	7	2.80	V+N	5	2.00			
V+Adj	4	1.60	Adv+Adv	6	2.40	Adv*2	4	1.60			
Adv+Adv	3	1.20	V+Adj+N	4	1.60	Adj+Adj	3	1.20			
Adj+Adj+N	2	0.8	V+V	4	1.60	Adv+V	3	1.20			
Adv*2	2	0.80	V+Adv	3	1.20	V+Adj	3	1.20			
Onomat	2	0.80	V+N+Adj	3	1.20	V+P	3	1.20			
Adj+Adv	1	0.40	Adj+Adj	2	0.80	V+V	3	1.20			
Comp	1	0.40	Adj+N+Adj	1	0.40	N+Comp	2	0.80			
N+Adj+Adv	1	0.40	N+N	1	0.40	N+N	2	0.80			
N+Adj+N	1	0.40	N+V	1	0.40	Adv+Adv+Adj	1	0.40			
N+N	1	0.40	Onomat*2	1	0.40	Adv+V+Adj+N	1	0.40			
N+V	1	0.40	Onomat+V	1	0.40	N+Adj+N	1	0.40			
V+N+Adj	1	0.40	V*2	1	0.40	N+V	1	0.40			
			V+Adv+V+N	1	0.40	V+Adj+N	1	0.40			
			V+N+Adv+Adj	1	0.40	V+Comp	1	0.40			
			V+Onomat	1	0.40						
	250	100.00		250	100.00		250	100.00			

日英仏ルオノマトペ総合表1

表の結果と分析：

- ① 日本語ではオノマトペ的表現の種類が3種類（擬態語・擬音語・擬声語）あるが、それに対応するルーマニア語では24種類、英語では22種類、フランス語では25種類の表現形式が使用されている。

擬態語については、後にまた詳しく説明するが、ここで先ず、用例の中で用いられた擬音語と擬声語を簡単に考察する。

擬音語は、55の用例で使用されているが、一回以上出現するものもあるため、実際に使われている擬音語の数は36語である。その中で、最も頻繁に使用されている形式は、「擬音語+鳴る」や「擬音語+言う」/「擬音語+聞こえる」などである。いくつかの例文を挙げてみる。

- 例： 「風がどうと鳴り」 (2)¹
 「ガラス戸はみんながたがた鳴り」 (19)
 「谷川はさらさら鳴りました」 (6.2)
 「歯をきりきり言わせました」 (58)
 「天井がガザガザガザガザ言います」 (120)
 「林は(…)ごんごんと鳴ったり、ざっと聞こえたりするのでした。」
 (197) など。

「鳴る」「言う」「聞こえる」類の動詞は「音を発生する側」と「音を聞き取る側」と、二つの要素が必要とされ、意味上聴覚に関連する動詞である。これらの動詞を修飾する擬音語はその聴覚による音の発生の仕方、音の聞こえ方を表現する。

動詞の種類が変わることによって、その動詞を修飾する擬音語の意味も変わることが多い。上記の例では、例えば「どうと落ちる」「がたがた震える」「さらさらと乾く」「きりきりとまわる」「がざがざと荒れる」と動詞を入れ替えると、オノマトペが擬音語ではなく、擬態語になる。

先行研究(泉、1976)では、日本語のオノマトペは独立性が高く、文脈外でも意味の解釈は可能であるとされているが、このように一つの意味以上をもつオノマトペの場合は、意味を解釈する過程で、文脈（特に動詞の種類）が大きな役割を担っていることが明らかになる。

次に、擬声語については、7語が9回使用されている。動物の鳴き声を表す一例（ひひんと、馬の鳴き声、例119）以外の擬声語は人間の声を表している。

- 例： 「わあと泣いてしまいました」 (6)
 「ホッホウと呼んで」 (70)
 「だあ、と言いました」 (83)
 「わあわあよろこびました」 (154)
 「みんなは、わあわあ呼んで」 (178)

¹ (2) などとは、実例の番号を示している。

この中で、例 154 の「わあわあよろこびました」は、擬態語としての解釈も可能だが、ここで子供たちの喜ぶ「様子」より、喜ぶ「声」のほうに焦点が当てられていると推測し、擬声語に分類した。また、例 70 と 83 の「ホッホウ」と「だあ」の擬声語は辞典に見出し語として存在しないが、実際の声を真似て表しているため擬声語とした。

日本語の擬態語・擬音語・擬声語をルーマニア語に翻訳したとき、24 種類の表現形式によって表現された。比率で言うと、最も多く使用された表現形式が「動詞」「副詞」「名詞」「形容詞」の順である。このように、一つの品詞によって日本語のオノマトベを表現したものは 170 例あった。これに対し、日本語のオノマトベを、一つ以上の品詞（複合的形式）によって表した用例の総数は 57 例あった。英語と仏語の場合でも、単純な形式（一つの品詞）が好まれていることが明らかになった。

中でも、「動詞」による翻訳が一番多いが（特に英語の場合）、ここで V（動詞）と分類した例は、日本語に使用されている動詞の直訳以外の動詞を示す。元の動詞だけで翻訳された場合は「動詞」としてではなく、「オノマトベの省略」と解釈した。

例： V（動詞）

日 「風がどうと鳴り」（2）

英 「the wind *soughed*」

日 「ガラスをがたがた言わせ」（19）

ル 「sa *zguduie ferestrele*」（音を立てて揺らせる）

「0」ゼロ（オノマトベの省略）

日 「鞆をしっかりとかかえて」（11）

ル 「*isi strinse ghiozdanul la piept*」（かかえた）

日 「馬がのっそりと立っていた」（111）

仏 「*le cheval se tenait devant lui*」V（動詞）としてではなく、「0ゼロ（オノマトベの省略）」と分類した。

日本語のオノマトベが、直接オノマトベで翻訳された例文の数は、その他の表現の数と比べて極めて少ない。詳しくは、以下⑥で説明する。

② 日本語の用例においては、擬態語がオノマトベ全体の 75% 近くを占めているのに対し、ル・英・仏では最も多く使用されている対応表現形式は「動詞」である。

これらの動詞の音響的な特徴には、本来の日本語のオノマトベと類似する要素が含まれていると考えられる。そのため、日本語のオノマトベはオノマトベによって翻訳されていないにもかかわらず、完全に省略されたとも言えないものが多い。

このような表現形式は、属している言語体系、またはその背景にある文化によってその他の言語と類似したり、異なったりするが、ある一つの言語体系の中で、ある程度推測可能な意味をもち、解釈が可能となる。

例：ル 「clipocea」 (1) <- clip- clip (クリップクリップ= 水の流れる音)
 「suiera」 (2) <- su/ suu (シュ・シュウ= 気圧が流れる音)
 「zguduie」 (19) <- du- du (ドウドウ= 重いものが動く音)
 「fosneasca」 (34) <- fos/ fis (フォシュ・フシュ= 乾いたもの、
 または堅くて薄いものが動く音)

英 「gurgled」 (1)
 「rattled」 (19)
 「trotted」 (22)
 「rustle」 (72)
 仏 「tinterent」 (16)
 「murmurer」 (72)
 「bruissant」 (98)
 「claqua」 (105)

オノマトペが省略された場合、「0」ゼロ表記で示した。これは、たとえば元の形式は「オノマトペ+動詞」であるのに、オノマトペの部分を翻訳せずに、動詞の部分だけが翻訳されたことを意味する。この場合、動詞の部分は、擬態語としての含意を持たない動詞によってのみ翻訳されている。

例：日 「ちゃんとすわっていました」 (12)

英 「went on **sitting**」

日 「ふと嘉助は目をひらきました」 (110)

仏 「Kasuke **ouvre** les yeux.」

日 「三郎はぼちゃぼちゃ、もう近くまで行きました」 (182)

ル 「Saburo mai avea putin si **ajungea** la ei.」 (三郎はもう少しで彼らのところに着きそうだった。)

③ 次に Adv(副詞)と Adj(形容詞)の形式を取り上げる。英語の場合は、副詞と形容詞の数はほぼ同じである。仏語では形容詞が副詞より多く、ル語では副詞の数のほうが形容詞の数よりやや多いが、あまり変わらない。

日本語では、オノマトペが典型的に動詞の修飾・限定をする機能を持っているとされる。そのため、翻訳の際、英語・ルーマニア語のように「副詞」となることは容易に予測できるであろう。しかし、「形容詞」によって翻訳される場合は異なる。次に例を挙げてそのメカニズムを探る。

例：日 「びかびか光る呼び子」 (21)

仏 「son sifflet **etincelant**」 形容詞

日 「教室はまだしいんとしていました」 (208)

仏 「la classe etait encore **silencieuse**」 形容詞

日 「嘉助もじっとそっちを見て待っていました」 (46)

ル 「uitindu-se **nemiscat** in aceeasi directie」 (動かずにそっちを見ていました)
形容詞

日 「ねむの木もぐったり見えました」 (158)

英 「the silk trees looked **droopy**」 形容詞

日本語で、これらの例は主に「主語+ (オノマトペ) +述語」(例2.1は、オノマトペ+ 動詞+ 主語)という文脈に出現し、仏・ル・英でも同じ述語文である。しかし、日本語の場合、オノマトペが動詞(述語)の修飾に用いられるのに対し、仏・ル・英の場合、これらのオノマトペは形容詞となり、主語を修飾する機能を担うようになる。つまり、状態のあり方ではなく、その状態の主語である物や人の様子、特徴を表すことになる。

上記の例に共通する特徴はもうひとつある。それは、動詞に「状態」の意味が含まれていることである。そのため、状態動詞を修飾するオノマトペが、翻訳の際に、形容詞になりやすいと考えられる。

対照的に、動詞が「動作・動き」を表している場合は、オノマトペは逆に副詞に翻訳されている。

例：日 「はっきり言いました」 (47)

ル 「spuse el **clar**」 (はっきり言いました)

日 「みんながどどん歩き出した」 (131)

英 「the others marched **steadily** on」

日 「鼻をぶるぶる鳴らしました」 (75)

仏 「souffler **bruyamment** de tous leurs naseaux」など。

日本語の中で、元々副詞と形容詞の品詞としての違いは、あまりはっきりしていない。伝統的に、体言(名詞)を修飾するのが形容詞で、用言(動詞)を修飾するのが副詞だとされる。しかし、「もっと前」「高く叫んだ」などのように、副詞が名詞を修飾したり、形容詞が動詞を修飾したりする例も多く存在する。同様に、オノマトペは副詞の一種だとされるが、その他の品詞との相違点について、あまり深く論じられていないため、研究の余地があると考えられる。

- ④ 英語と仏語では一番多く用いられた複合形式は Adj+N (形容詞+名詞) だが、ル語にはなかった。英語で形容詞は名詞の前に配置され名詞の修飾をするが、仏語とル語では、英語の翻訳に存在しない「名詞+形容詞」表現が最も一般的である。しかし、強調やその他の修辞学上での効果を得るために、特に文学作品の中で、倒置の形式 (形容詞+名詞) の利用も許される。このような倒置された形式は本研究で引用した仏語の翻訳版に数多く使用されている。

例：仏 「marcha a grands pas」 (74) <-通常 「marcha a pas grands」
 「decriverent un grand cercle」 (85) <-通常 「decriverent un cercle
 grand」

ル 「de brusques remous souleverent l'eau」 (153) <-通常 「de remous brusques」

ルーマニア語では「Adj+N」の形式は3例の複合形式の中に含まれているが、

例：ル a. 「ramase cu gura cascata de uimire」 (驚きで口を開けたままにして)

(18) では、「N1+Adj+N2」の形容詞「cascata」は N2 (第二名詞) ではなく、N1 (第一名詞) を修飾し、また N2 「de uimire」は形容詞「cascata」を修飾する。

例：ル b. 「toti, rupti de oboseala」 (みな、疲れはてて) (64)

また (64) では「Adj+N」の形容詞「rupti」はこの表現の前に出現する主語である代名詞「toti」を修飾し、名詞「de oboseala」は形容詞「rupti」を修飾する。

例：ル c. 「parul rosu ii flutura, plin de apa」 (水にぬれた赤い髪は揺れて) (180)

さらに (180) では、例 (64) と同様に、「Adj+N」の形容詞「plin」は、主語「parul」を修飾し、名詞「de apa」は形容詞「plin」を修飾する。

- ⑤ ルーマニア語では、N (名詞) 表現が多く、仏語の名詞表現の2倍程度であることが興味深い。この結果は Puscaru (1921) のオノマトペの派生についての記述に一致すると言える。²

実際に、オノマトペ、またオノマトペの動詞から派生したと考えられる名詞の例を次にいくつか挙げてみる。

例：ル 「sa plinga cu hohote」 (ホホテ=大声で泣く) (7) <- 動詞 a hohoti (ホホティ) <- オノマトペ ho-ho (ホホ)

「tisnea in bulbuci」 (ブルブッチ=音を出して噴き出す) (71) <- オノマトペ bul-bul (ブルブル)

² ルーマニア語のオノマトペに関する研究では、これらがとても転用しやすい品詞とされている。動詞 (述語) として用いられることが最も多く、その他、副詞、名詞としても使うことが可能である (Jordan, Robu, 1972)。さらに、オノマトペから派生したことばについては、Puscaru (1921) が動詞と名詞が一番多いと指摘する。

- 「un bubuit de tunet」 (1 1 4) (ブブイート) 雷が鳴る音) <- 動詞 a bubui
(ブブイー) <- オノマトペ bum (ブーム)
- 「cazu in apa cu un pleoscait」 (プレオスカイト) 音をして水に入った)
(1 4 8) <- 動詞 pleoscai (プレオスカイ) <-
オノマトペ pleosc (プレオスク)
- 「scotind cu un pufait apa pe nas」 (プファイト) 鼻から水を噴き出して)
(1 4 9) <- 動詞 pufai (プーファイ) <-
オノマトペ puf (プッフ)

このように、音声・意味的特徴に基づいて、オノマトペに由来すると推測できる名詞は13例があり、それ以外の例はその他の名詞である。

フランス語の訳には、このような例が二つしかないが、英語では20例ほどある。

- 例：仏 「un brouhaha general s'eleva」 (1 7 6)
「retentit le grondement du tonnerre」 (1 8 9)
- 英 「Saburo called down with a chuckle」 (1 3 4)
「something fell with a crash」 (1 9 5)
「in a great whoosh」 (2 0 2)
「washed the bowl with a chatter」 (2 0 6) など。

英語の場合は、もとの動詞に冠詞を前置させることによって名詞化が可能となり、ことば自体には音声・形態上の変化がないため、このような名詞が多いと予測できる。それに対して、ルーマニア語、フランス語ではオノマトペに由来する動詞の数は英語より少なく、また、一般的に、動詞に冠詞と接尾語と両方を付加させ、名詞化を行うため、ある動作や状態の様子・あり方を表現する際、オノマトペ的名詞より、その他の表現形式(副詞、形容詞)が好まれると考えられる。

- ⑥ オノマトペ (Onomat) の数については、ル語と仏語では各々10語および7語があり、英語と比べて多い。

ルーマニア語に関しては、本研究のために、自分自身で宮沢賢治の作品をルーマニア語に翻訳する必要があり、その際、あるオノマトペがルーマニア語にも存在していると思ったとき、可能な限りオノマトペで翻訳するように心がけた。そのため、オノマトペの数が10語という結果に繋がったかもしれない。

また、英語で使用された2つのオノマトペ「Whoosh!」(70)と「Gee-up!」(83)は、ルーマニア語とフランス語でもオノマトペによって翻訳された。

- 例：ル 「hu, huu, huu」(フーフー)と「Diii!」(ディー)、仏「Ho!Ho!」と「Hue!」とで、3つの言語において、これらのオノマトペに含まれている音韻要素が、類似していると言える。この2つのオノマトペは、日本語の用例では、「ホッホウ」

と「だあ」であり、擬声語と分類されている。「ホッホウ」については、対応する翻訳上のオノマトペと音声的に類似していることが興味深い。

その他、ルーマニア語、フランス語において、オノマトペで翻訳された例は、次のとおりである：

ルーマニア語	フランス語	日本語
Fiuuu! (24) (フィュー)	Drr- Drr	ビルル 音
Fiuuu! (54) (フィュー)	Drr- Drr	ビルルッ 音
Pic-pic-pic (97) (ピクピクピク)	—	ポタリポタリ 音
Brrr (113) (ブルルル)	—	ぶるぶる 態
Pic-pic-pic (120) (ピクピクピク)	—	ガザガザガザガザ 音
Lipa-lipa (160) (リバリバ)	—	びちゃびちゃ 態
Bildibic (163) (ブルデゥブック)	—	とぶん 音
Pleosc (185) (プロスク)	—	ぼちゃんぼちゃん 音
—	Dzz-dzdz (19)	どう 態
—	Trr-trr (25)	ビルルル 音
—	Schtt! Schtt! (81)	しゅう 音
—	Plouf! (148)	どぶん 音

表 2

これらのオノマトペは、日本語ではほとんど擬音語である。

- ⑦ 0 (ゼロ) とは、日本語のオノマトペが省略され、翻訳されなかったことを示す。日本語のオノマトペに相当することばがないとき、またはオノマトペを省略しても意味や雰囲気十分に表現できると判断されたとき、オノマトペは省略され、それ以外の出現語のみ翻訳される。

省略されたオノマトペの数については、英語とルーマニア語が類似しており、フランス語の場合は0ゼロの数がより少なくなっていることが対照表から分かる。

また、例 3、188、191 はルーマニア語、フランス語ともに0ゼロという形式である。次に例を挙げ、オノマトペ省略の原因を探る。

例：日 「ちょっと教室の中を見ますと、二人ともまるでびっくりして棒立ちになり、それから顔を見合わせてぶるぶるふるえましたが、ひとりはどうとう泣き出してしまいました。」 (3)

仏 「Ils passèrent tout joyeux sous le portail, mais quand ils virent l'intérieur de la salle de classe, de surprise, ils restèrent plantés comme des piquets et se devisagèrent en **tremblant.**」

ル 「Dar cind s-au uitat in clasa amindoi au inlemnit parca de uimire. S-au uitat unul la altul si au inceput sa **tremure**, iar unul din ei a izbucnit chiar in plins.」 (ふるえる)

この場合は、日本語の「ふるえる」という動詞は「ぶるぶる」というオノマトベから派生したと考えられ、音声上・意味上でも、もととなるオノマトベと重なる部分がある。また、フランス語、ルーマニア語においては、このような表現は存在しない、あるいは必要とされないため、動詞だけ翻訳され、オノマトベは省略されたと考える。

例：日 「山の草はしんしんとくらくなり、そこらはなんとも言われぬ恐ろしい景色にかわってました。」（188）

仏 「...toutes les plantes de la montagne s'étaient **obscurcies**, les environs s'étaient transformés, de manière indéfinissable, en un paysage terrifiant.」

ル 「...iarba de pe munte **se innegri** si ea, de ti se facea frica sa te uiti in jur.」
(暗くなる)

ここで使用されている「しんしん(と)」というオノマトベは辞書にはこの形式では存在しないが、「しん(と)」というオノマトベの反復形として作られたと予測され、「しん(と)」の意味に基づき解釈できる。また、文脈の中に、このオノマトベ以外にも、その場の状態・様子を表す表現はいくつかあるため(例えば、「くらくなり」「恐ろしい景色」)、仏語、ルーマニア語では、オノマトベは省略されたと考える。

例：日 「すると三郎もなんだかはじめてこわくなったと見えて、さいかちの木の下からどぼんと水へはいつてみんなのほうへ泳ぎだしました。」（191）

仏 「Alors pour la première fois, Matasaburo parut comme effrayé, du pied du fevrier il **sauta** dans l'eau et se dirigea à la nage vers les autres.」

ル 「Abia atunci parca i se facu si lui Saburo frica si **sarind** in apa veni repede inot spre ceilalti.」(飛び込んで)

「どぶん(と)」というオノマトベは、先行する文中にも何回か現れ、ルーマニア語では N(名詞)(例 148, 150, 179)、または V(動詞)(例 144)によって翻訳された。フランス語では Adj+N(形容詞+名詞、例 144, 179)、Onomat(オノマトベ、例 148)や Adv+Adv(副詞+副詞)によって翻訳された。

宮沢賢治は、これらのすべての文脈において同じ形式を使用するが、フランス語、ルーマニア語訳では連想、帰納的方法による解釈が好まれるため、例 191 ではオノマトベは省略されたと考えられる。

例：日 「けれどもそのこどもはきよろきよろ室(へや)の中やみんなのほうを見るばかりで、やっぱりちゃんとひざに手をおいて腰掛けにすわってました。」（12）

英 「But the boy just gazed around **big-eyed** at the classroom and the other children, and went on sitting with his hands folded in his lap.」

オノマトペが省略された英語の例 1 2 の場合も、同じ文脈（ちゃんとすわる）が何回か繰り返し使用されたため（例 4、8）、例 12 ではオノマトペは省略されたと言える。また、「手をひざに置く」と「ちゃんと座っている」という 2 つの表現の喚起するイメージと、オノマトペの意味とは意味上重なる部分もあるため、オノマトペを省略しても意味は十分に伝えることができると考えられる。

- ⑧ V+N（動詞+名詞）表現は、英・仏・ル全ての翻訳において使用されている。この用法は実は「動詞+助詞+名詞」という形式であるが、意味上では「動詞」または「動詞+副詞」の 2 つの表現に相当している。

つまり、「助詞+名詞」という形式は動詞と一緒に一つの慣用語を作ったり、また動詞の修飾をするはたらきを持ったりする。後者の場合は、動詞の表す動作や状態のあり方を表現するという点では副詞のはたらきに類似していると考えられる。

例：日 「先生は呼び子をピルルと吹きました。」（24）

英 「And he gave a trill on his whistle.」

上記の例では、「gave a trill」という表現は意味上で「trilled」という動詞に相当する。

日 「みちのはばが五寸ぐらいになったり、また三尺ぐらいに変わったり、おまけになんだかぐるっと回っているように思われました。」（100）

英 「... the path kept shrinking until it was only about six inches wide, than expanding to three feet, and, what was worse, it seemed almost to be going around in circles.」

また上の例では、名詞「in circles」は動詞「going around」を修飾し、動作の進行の様子を表すため、副詞的なはたらきをもつと言える。

フランス語の用例を見ると、

例：日 「前へ行った子もときどきふりかえって見て、あとの者もじっと見ていたのです。」（30）

仏 「tous les autres, derriere, le devoraient des yeux.」

例（30）では、「devoraient des yeux」という慣用語を動詞「regardaient」によって入れ替えることが可能であると言える。

日 「そのときみんなはぎょっとしました。」（35）

仏 「A ce moment la classe s'immobilisa d'etonnement.」

また例（35）では、名詞「d'etonnement」は動詞「s'immobilisa」を修飾し、動詞の表している状態のあり方（ここでは、原因）を表すという点で、副詞的な用法に類似すると考えられる。

ルーマニア語訳においても、この2つの用法が観察できる。

例：日 「佐太郎が大威張りで、上流の瀬に行って箒をじゃぶじゃぶ水で洗いました。」（171）

ル 「Sataro, mindru si solemn, urca mai sus pe riu unde era mai putin adinca apa si incepu sa **treaca sita prin apa**, ca si cum ar fi spalat-o.」

この例では、慣用語「treaca prin apa」（水に通す）は、動詞「clati」{流す}と同じ意味である。

日 「そのとき風がどうと吹いて来て教室のガラス戸はみんながたがた鳴り」（16）

ル 「Si chiar atunci veni o pala de vint si toate geamurile clasei **zdranganira cu zgomot**」

例（16）では、名詞「cu zgomot」（音を立てながら）は、動詞「zdranganira」（鳴る）を修飾し、状態のあり方を表す。その用法は副詞的な用法である。

- ⑨ ルーマニア語では Comp（比喩）表現が多いことも興味深い。オノマトペを適切に翻訳する言葉がないときは、比喩表現を用いて日本語のオノマトペを説明的方法によって表現したことが示される。

例：日 「嘉助が河原の砂っばの上で、ぴよんぴよんはねながら高く叫びました。」（157）

ル 「"Dai cu dinamita si vin pestii gramada!" striga Kasuke topaind **ca o vrabie pe nisipul de pe mal.**」

例（157）では、「ca o vrabie」は「すずめのように」という意味である。

このように、比喩的表現を用いると、本来の日本語の表現の意味は伝えられるが、翻訳後に得た表現を再び日本語に直訳すると、元の意味と異なったものになる。たとえば、上記の例157では、日本語の「ぴよんぴよんはねる」という表現をルーマニア語に訳すと、「すずめのようにはねる」となる。しかし、日本人にとって、「ぴよんぴよんはねる」とは、本来「かえるやうさぎのようにはねる」というイメージを喚起するため、「すずめのようにはねる」という表現は受け入れがたい表現となる。

その他の例も次に挙げてみる。

例：日 「みんなはおじぎをする間はちょっとしんとなりましたが、それからまたがやがやがやがや言いました。」（31）

ル 「Se linistira pentru citeva momente cit s-au aplecat sa salute, apoi incepura iar **ca niste giste.**」

「がちょうのように（うるさい）」の場合は、「がちょうのように」という表現は同じ形で日本語に存在しないが、ルーマニア語でも、日本語でもガチョウの「がーが

一」という鳴き声を連想すると、「うるさい」というイメージが、ある程度理解できると予測される。

日 「馬の赤いたてがみと、あとを追って行く三郎の白いシャッポが終わりにちらっと見えました。」(88)

ル 「Mai vazú **ca prin vis** coama rosie a calului si camasa alba a lui Saburo care alerga dupa el si atit a fost.」

「夢を見ているように」では、ルーマニア語でも文字通りの解釈は不可能である。文字通りの「夢を見る」と異なって、「夢を見ているように」という表現は、「速い + ぼんやり」という意味を持っているため、日本人にとって解釈は難しいと考えられる。

日 「霧がふっと切れました。」(121)

ル 「Ceata disparu **ca prin farmec**」

「魔術はかけられたかのように」のルーマニア語での意味は、「速い、にわか」である。

上述のように、日本語のオノマトペを解釈する際、ルーマニア語に、音声的に対応することは存在しないという問題の他に、オノマトペの認識の面でも、日本語で連想されるイメージと異なる場合が多い。従って、オノマトペの説明を行うとき、文脈が一つの必須要素となると言える。

⑩ 全体的には、1・2番目に多い表現がそれぞれ英・仏・ルの言語体系の特徴を示すものであると考えられる。

つまり、英語の場合は、動詞が圧倒的によく用いられるが、フランス語では、動詞と形容詞が多く用いられている。さらに、ルーマニア語では、動詞、そして副詞と名詞表現が最も多く使用されている。

このように、主に副詞として機能すると言われている日本語のオノマトペを翻訳する際、英・仏・ルのいずれの言語においても、動詞が中心になっていることがわかった。ルーマニア語の場合はオノマトペを翻訳するとき、副詞的表現が一番多く使用されると予測していたのだが、副詞は全体の15%しか占めていなかった。

日本語の場合は、逆に動詞の数は少なく、オノマトペの数は多いと言われている(田守、1991)。そのため、日本語のオノマトペと共起する動詞の特徴、またオノマトペとこれらの動詞との関係を探ることも、今後のオノマトペ研究の一つの課題としたいと思う。

3. 3 日・ル擬態語対照分析

ルーマニア語に擬態語は存在しないため、ここでは日本語の擬態語の用例を取り上げ、表に分類し、ルーマニア語と対照させながら詳しい考察を行う。

表で用いた記号は次の略語である：

態= 擬態語、()= 助詞、「」= 形式動詞

MV= Main Verb (主な動詞)、V= 動詞、Adv= 副詞

Adj= 形容詞、N= 名詞、P= 代名詞

Onomat= オノマトペ、Comp= 比喩表現

*2= 繰り返し (例：Adv*2= 副詞の繰り返し)

0= ゼロ (オノマトペの省略)

+ = 一つのオノマトペは二つか二つ以上の品詞で翻訳される。

日本語				ルーマニア語	
100	態+MV	(と)	副詞	V	43
44	態+V	103	144	Adv	32
9	態+「して」	(O助詞)	動詞	Adj	28
7	態+「していた」	79	29	N	22
5	態+「なった」	(の)	形容詞	V+Adv	9
5	態+「した」	3	10	0	8
3	態+N	(に)	名詞	N+Adj	6
3	態+「した」+N	1	3	V+N	6
2	態+「する」	合計	合計	Adv+V	4
2	態+「なって」	186	186	Comp	4
1	態+「させた」			V+V	4
1	態+「させて」			Adj+Adj	3
1	態+「してきた」			Adv*2	3
1	態+「なってくる」			V+P	3
1	態+「なっていた」			N+N	2
1	態+V+N			Onomat	2
186	合計			Adj+Comp	1
				Adv+Adv+Adj	1
				Adv+V+Adj+N	1
				N+Adj+N	1
				N+V	1
				V+Adj	1
				V+Adv*2	1
				合計	186

表 3 日ル擬態語考察総合表

日本語の擬態語について、統語上のはたらきを判別する際、擬態語の形態や文中の語順ではなく、機能と意味を基準にてし、分類した。形態を基準にすると、助詞「の」を伴って名詞の修飾をするオノマトペ以外（本研究で名詞と見なす）、すべてのオノマトペは動詞修飾の役割を担うため、そのすべてを副詞と分類しなければならなくなる。

そこで、本研究においては、機能を中心にして分類を行い、動詞「する」を伴うオノマトペを動詞化したものと見なし、動詞「なる」を伴うオノマトペを形容詞に分類する。動詞の修飾をするその他のオノマトペを、先行研究に従って、副詞とする。

日・ル擬態語考察の結果と分析：

① 擬態語の統語的特徴について

辞典の中で普通あるオノマトペ（擬態語）と一緒に使用されるとされる動詞（ここでMVと表記する）の使用率は、その他の動詞（ここでVと表記する）の使用率より高かった。「態+MV」形式は100回用いられているのに対し、「態+V」形式は44回しか使用されていなかった。

つまり、日本語の擬態語は、ある特定の動詞と一緒に用いることが一般的であると考えられる。宮沢賢治のように、その他の動詞と一緒に用いることは、個人のスタイルによるものと言える。しかし、擬態語（オノマトペ全体も同様）の独立性を強調することもある。つまり、一般的に一つの動詞のみと共起し、使用されてきたオノマトペが、現代語の中では、単独で使用することもできれば、その他の動詞と共起することも可能になった。それは、オノマトペ自体は、意味上・形態上でも独立しているからだと考えられる。

また、これらの擬態語をルーマニア語に翻訳する際、主に動詞によって翻訳されることは明らかである。ルーマニア語訳では、動詞で翻訳されたオノマトペの総数、66例の中、40例（60%）は擬態語を翻訳したものである。

この結果からも、日本語の擬態語（オノマトペ）の多くは副詞的意味以外、動詞的特徴も持っているのではと考える（単独で述語になれる）。また、一つの動詞としか共起しないオノマトペ（擬態語を含む）の場合、そのオノマトペを副詞ではなく、複合動詞の一種と見ることも可能であると考ええる。

たとえば、「ぐっすり眠る」「にこにこ笑う」などの例を考えると、「深く眠る」「よく笑う」などの副詞を用いた例と比べてみると、

- i. 副詞の場合と異なって、上記の擬態語は一つの動詞だけを修飾する。
- ii. 動詞を省略して「赤ちゃんは、もうぐっすり（だ）」「彼女はいつもにこにこ（だ）」のような文脈でも擬態語の意味を理解することが可能であり、述語として機能する。対照的に「*彼女は深く（だ）」「*みんなはよく（だ）」では、動詞は省略されると文脈全体の意味は解釈不可能になる。

オノマトペと動詞との関係を探ることによって、オノマトペについての新たな事実が分かると考え、今後の研究課題とする。

次に、ルーマニア語で動詞によって翻訳された擬態語の用例を挙げる。

例：日 「教室のなかのこどもはなんだかにやっとわらってすこしうごいたようでした。」 (17)

ル 「**Baiatul din clasa rinji** deodata si se misca parca putin.」 (歯をむき出して笑う) 動詞

日 「大きなほうの子どもらはどっと笑いました」 (33)

ル 「**Copiii cei mai mari pufnira in ris**」 (一斉に笑い出した) 動詞

日 「けれどもみんなきよろきよろ三郎のほうはみていても、やはり忙しそうに棒かくしをしたり」 (50)

ル 「**Ceilalti copii, desi se zgiau cu totii la el, se faceau ca sint foarte ocupati**」 (興味を示して見る) 動詞

これらのオノマトペと対照的に、どの動詞とでも自由に共起できる擬態語 (オノマトペ) もある。この場合の擬態語 (オノマトペ) は、ある程度の独立性を持ち、一般的に動詞を修飾・限定するのに用いられる。そのため、これらの擬態語 (オノマトペ) は副詞と考えても良いと思う。

例：日 「日はぱっと明るくなり、にいさんがそちの草の中から笑って出て来ました。」 (76)

ル 「**Soarele iesi deodata** dintre nori si fratele mai mare aparu si el rizind dintre ierburi.」 (急に) 副詞

日 「三郎は両手で本をちゃんと机の上へもって」 (59)

ル 「**Saburo tinea cartea cu ambele miini, frumos, pe banca**」 (きっちり) 副詞

形式動詞「する」の修飾の用例は、合わせて 29 例あるが、「する」の基本形より、様々な活用形の方が頻繁に使用されている。たとえば、「して」「していた」「した」「させた」「させて」などである。形式動詞「する」には内在的意味はないが、このように活用することによって、オノマトペにテンス、アスペクトの意味が加えられ、オノマトペ自体が活用し、動詞になると言われている (田守、1991、苧阪、2001)。

日本語のその他の転用・派生の法則を考慮すると、動詞「する」を伴って動詞化する品詞の中で「名詞」が一番多いと言える。実際に、状態を表す「態+していた」型を

除き、動詞「する」を伴う擬態語の22例をルーマニア語に翻訳した際、N（名詞）は使用された例は全部で8例があった。

例：日 「みんなしいんとして、水を見つめて立っていました。」（172）

ル 「Se facu liniste si toti stateau asteptind cu ochii pe apa.」（しずかになった）名詞

日 「佐太郎はびくっとしましたけれども、まだ一心に水を見ていました。」（175）

ル 「Sataro tresari o clipa, dar se concentra iar privind apa.」（一瞬動いた）動詞+名詞

本研究では動詞「する」の付加による動詞化以外のオノマトペの動詞化現象をオノマトペの転用ではなく、オノマトペから派生した動詞と考え（たとえば、田守,1991で言われている、語尾「一めく、一つく」などの付加によるオノマトペの動詞化現象）、研究の対象としない。同様に、形容詞に特有の語尾がついているオノマトペをオノマトペの転用ではなく、形容詞と分類するため、ここでは取り扱わない。

その理由は、動詞「する」を伴うオノマトペと異なって、これらの動詞化・形容詞化の例では、オノマトペはオノマトペとしての特徴を失い、新しいことばの語幹となったと考えるからである。

たとえば、動詞「ばさつく」の場合、「ばさばさ」というオノマトペは動詞として機能する例だとされる（田守,1991）。しかし、「ばさばさする」と異なって、オノマトペの本来の形は二音節反復形ではなく、二音節形になり、もとの形に戻れない（「*ばさばさつく」とは言えない）。また、助詞を伴うこともできない（「*ばさとつく」「*ばさにつく」と言えない）。したがって、これらの例はオノマトペの転用の例ではなく、オノマトペの派生の例であり、動詞と考えるべきである。

同様の考えによって、先行研究で形容詞として機能するとされるオノマトペの場合、オノマトペの転用ではなく、形容詞とするべきであると考えられる。

さらに、先行研究と違う点はもう一つある。それは、動詞「なる」を伴うオノマトペの問題である。先行研究では（田守,1991）特別に言及されていないため、副詞と考えていると予測できるが、本研究においては、形容詞とする。たとえば、

例：日 「みんなはしんとなってしまうました。」（9）

日 「黒板の上にはきのう掃除のときぞうきんでふいた跡がかわいてぼんやり白い縞になっていました。」（43）

日 「息もはあはあとなって、自分までがいっしょに空を翔けて行くような気持ちになって」（202）である。

この中の「しんと」「ぼんやり」「はあはあ」という3つの擬態語を形容詞とする。これらは、統語上では動詞を修飾するため、一般的に副詞とされるが、意味的には、動詞「なる」のあり方を表すのではなく、主語（名詞）の何らかの特徴、状態を表す

と考える方がより適切であろう。状態を表す例 158 の動詞「見える」の場合も同じように考える。

例： 日「ねむの木もまるで夏のようにぐったり見えました」（158）

名詞についても、本研究で名詞と分類したオノマトペは先行研究のものと異なる。本研究で「だぶだぶの上着」のように、助詞「の」を伴って名詞の修飾を行うオノマトペを含めて名詞とする。先行研究で名詞とされたオノマトペ³は同じように名詞と見なすが、本研究で取り上げた用例の中に、このようなはたらきの例は見当たらなかった。

② 助詞について

助詞「と」を伴う擬態語の数は圧倒的に多い。しかし助詞を伴わずに使用されている擬態語も少なくない。

助詞の付加について、田守（1991）は「二音節反復形のオノマトペが様態副詞として機能する場合、助詞「と」を随意的に伴うのに対して、同じ音韻形態を有するオノマトペが結果副詞として機能する場合、助詞「に」を必ず伴う」とする。

本研究において、「に」を伴う例は一つだけあったが、田守の見解によると結果副詞は一つしかないということになる。しかし、実際は状態副詞か結果副詞かを判断することは難しい場合もあるため、本研究においてその区別はしない。

例：

1. 教室の中はしいんとしてだれもいず、黒板の上にはきのう掃除のときぞうきんでふいた跡がかわいてぼんやり白い縞（しま）になっていました。（43）

例（43）では、「ぼんやり白い縞になっていました」の擬態語「ぼんやり」は「に」助詞を伴っているけれど、本研究において形容詞とした。

2. 五郎はじつに申しわけないと思って、足の痛いのも忘れてしょんぼり肩をすぼめて立ったのです。（20）
3. その時風がざあっと吹いて来て土手の草はざわざわ波になり、運動場のまん中でさあっと塵（ちり）があがり、それが玄関の前まで行くと、きりきりとまわって小さなつむじ風になって、黄いろな塵は瓶（びん）をさかさまにしたような形になって屋根より高くのぼりました。（52）
4. 青い皮をくるくるはいで鞭をこしらえて手でひゅうひゅう振りながら、上の野原への道をだんだんのぼって行きました。（63）

例 20, 52, 63 では、太字のオノマトペは副詞ではあるが、状態副詞か結果副詞かについては判断することは難しい。

³名詞: a. 単独名詞：隣のわんわんに近づいてはだめよ。

b. 複合名詞：よちよち歩き、ひそひそ話し、ぶつ切り、ぼろ負け

助詞「の」を伴って名詞の修飾をする擬態語の例は3つあるが、同じ擬態語が同様の文脈で3回使用されている用例である。ここでは名詞とするが、意味的には形容詞と類似していると考えられる。ルーマニア語では、形容詞で翻訳されている。

例：日 「変てこなねずみいろのだぶだぶの上着を着て」 (13)

ル 「imbracat cu o haina **larga** cenusie」 (大きい) 形容詞

日 「その人は白いだぶだぶの麻服を着て」 (36)

ル 「Era imbracat cu un costum alb **labartat**」 (大きすぎる) 形容詞

日 「すると三郎はさっきのだぶだぶの白い服の人のところへ行きました。」
(39)

ル 「Saburo se duse in spate, linga barbatul cu costum **larg** si alb」 (大きい)
形容詞

③ 擬態語のルーマニア語訳について

擬態語をルーマニア語に翻訳する際に起こる変化については、オノマトペ全体の考察で得られた結果とほぼ同じである。動詞表現が一番多く、その次に副詞、形容詞と名詞表現も頻繁に使用されたという結果である。

しかし、副詞・形容詞によって翻訳された擬態語の例は、全体のオノマトペの86%と87%を占めているということが興味深い。

それは、ルーマニア語に存在しない擬態語を翻訳する際に擬態語の「状態、あり方を表す」という意味的特徴をできるだけ保つようにしようとするためだと考えられる。また、名詞で翻訳された場合でも様態を表す副詞的用法の名詞が多い。

例：日 「きりきりとまわって小さなつむじ風になって」 (52)

ル 「apoi ridica in **virtej** praful din mijlocul curtii」 (つむじ状態に) 名詞

日 「先生はちらっと運動場を見まわして」 (54)

ル 「uitindu-se in **fuga** prin curte fluiera o data din fluier」 (短時間) 名詞

日 「みんなはまるでせかせかと走ってのぼりました。」 (67)

ル 「Alergara in **graba**」 (いそいで) 名詞

さらに、オノマトペの省略例14例の中、擬態語が省略された例は11例あり、それに対応できる適当な表現がルーマニア語になかったことを意味する。

逆に、日本語の擬態語を、ルーマニア語でもオノマトペによって表現した例も二つある。

例：日 「嘉助はぶるぶるふるえました。」 (113)

ル 「Pe Kasuke il apuca un tremur: **brrr.**」

日 「その男はこっちへびちゃびちゃ岸をあるいて来ました。」(160)

ル 「Apoi barbatul o porni lipa- lipa incoace pe mal.」

しかし、例113のオノマトペは、ルーマニア語では様子を表すというより、「震えるときに発する声」を表し、つまり日本語の擬声語に相当する。また、例160のオノマトペも擬態語ではなく、「歩く音」を表し、その意味では日本語の擬音語に相当する。

3.4 対照研究のまとめ

本稿で、宮沢賢治の作品「風の又三郎」から全てのオノマトペを取り出し、日本語のオノマトペ、およびそれらの英・仏・ル訳の使用頻度、種類と形式、機能について考察し、分析した。

その結果と先行研究の概観で得た結果との相違点は以下のとおりである。

① オノマトペの使用頻度に関して、先行研究では言及されていないが、本対照研究では使用頻度についての結果は次のようである。

- * 日本語では、オノマトペは擬態語・擬音語・擬声語の順で頻繁に用いられている。
- * 英語訳では、動詞、副詞、形容詞の順に最も多く翻訳される。
- * フランス語訳ではその順番は、動詞、形容詞、副詞である。
- * ルーマニア語訳では、動詞、副詞、名詞の順となる。

さらに、ルーマニア語に存在するオノマトペは日本語の擬声語・擬音語と類似し、擬態語に相当する言葉は存在しないため、日本語のオノマトペをオノマトペで訳す例は極めて少ない。

② オノマトペの種類と形式については、先行研究でオノマトペは二種類（擬態語と擬音語、擬態語と擬声語）、三種類（擬態語、擬音語、擬声語）、またはそれ以上（筧、1988）に分類されるが、ここで、擬態語・擬音語・擬声語の3種類に分けた。

本稿で挙げているオノマトペを、英・仏・ルに翻訳すると、平均で約23種類の形式が用いられている。それは、日本語のオノマトペを翻訳する難しさを意味する一方、逆の発想で日本語オノマトペの性質について、新しい見解を生み出す可能性もある。

また、助詞「と」の付加・欠如について、先行研究で随意的だとされる。本対照研究では、擬態語について助詞の付加・欠如という点からも分析し、擬態語が助詞「と」を伴う例は103例、伴わない例は79例という結果になった。

③ オノマトペの機能、及び統語的特徴について、先行研究で日本語のオノマトペは基本的に副詞として機能するとされている。その他、動詞、形容詞、名詞として用いられることもあるとされている。

本対照研究では先行研究と異なる部分がある。それはオノマトペの機能を判断する基準である。つまり、先行研究による分類は、形式及び統語的特徴を基準とするが、ここで意味と統語的特徴を基準としたため、分類の方法が異なる。

4. 本研究の意義と今後の展望

擬態語・擬音語・擬声語が多いことは日本語の一つの特徴である。しかし、これらが存在しない言語体系を母語とする日本語学習者にとっては、日本語のオノマトペは理解しにくい表現である。

ルーマニア語には、オノマトペと総称され、擬声語、擬音語は多少存在するが、擬態語という概念はない。そのため、日本語のオノマトペの特徴を探り、ルーマニア語と対照させながら説明をする研究は必要だと思い、本研究を行うことに至った。

英語やフランス語との対照研究も加え、オノマトペに関する普遍的要素、相違点を探りながら、日本語のオノマトペの特徴を明らかにすることを試みた。

その結果、日本語のオノマトペを、外国語との対照という視点に加えて、日本語文法の視点からも、新しく見直す必要があると考える。そして、その特徴を学習者のために分かりやすくまとめ、説明する必要があると思う。

参考文献：

1. 泉邦寿、1976、「擬声語・擬態語の特質」、鈴木孝夫、「日本語の語彙と表現」所属、大修館書店
2. 大坪併治、1989、「擬声語の研究」、明治書院
3. 田守育啓、1991、「日本語オノマトペの研究」、神戸商科大学経済研究所
4. 日向茂男 監修、1991、「擬音語・擬態語の読本」、小学館
5. 渡辺清子、1979、「日本語と英語に見られる擬声語と擬音語」、日本女子大学紀要 29、30号所属
6. Acad. Al. Graur, Mioara Avram si Laura Vasiliu、1966、*Gramatica limbii romane vol.1* editia a2 a revazuta si adaugita、Academia RSR、Bucuresti
7. Ion Coteanu, Luiza Seche, Mircea Seche、1984、*DEX*、Edit. Academiei RSR Institutul de Lingvistica din Bucuresti
8. Iorgu Iordan si Vladimir Robu、1978、*Limba romana contemporana*、Editura didactica si pedagogica、Bucuresti
9. Monica Hamciuc、2003、日本語の擬態語・擬音語、ルーマニア語と対照研究

例文引用源：

1. 宮沢賢治、1951、1967、「童話集 風の又三郎」岩波文庫
2. Kenji Miyazawa、1989、*Matasaburo, le vent dans Train de nuit dans la Voie lactée*、traduit du Japonais par Hélène Morita、Intertextes éditeur、Paris
3. Kenji Miyazawa、1992、*Matasaburo the Wind Imp*、Translated by John Bester、Kodansha English Library